

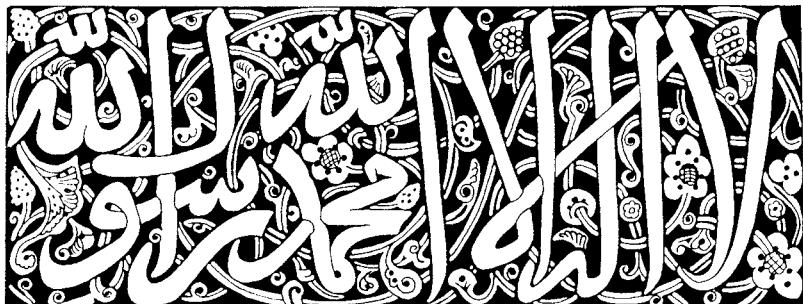
書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

文語訳 古 蘭（ヨーラン）

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com



SAMPLE 文語訳  
Shoshi-Shinsui.com 古ヨーラン蘭

大川周明 訳・註釈

上

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

上卷 目次

古蘭について

開經章 牝牛章

女人意

高壁  
戦利品章  
懺悔章

三  
一  
二

ヨセフ 章電雷竜アブラハ

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

下  
卷

|    |     |        |          |
|----|-----|--------|----------|
| 第一 | 第十五 | 蜜蜂章    | ヒヅル<br>章 |
| 第二 | 第十六 | 蜜蜂章    | ヒヅル<br>章 |
| 十九 | 第十七 | 夜行章    | ヒヅル<br>章 |
|    | 第十八 | 洞窟章    | ヒヅル<br>章 |
|    | 第十九 | マリア章   | ヒヅル<br>章 |
|    |     | タア・ハア章 | ヒヅル<br>章 |

|      |      |      |        |      |      |      |     |      |      |      |      |      |        |       |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|--------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|--------|-------|------|------|------|------|------|------|
| 第三十三 | 第三十四 | 第三十五 | 第三十六   | 第三十七 | 第三十八 | 第三十九 | 第四十 | 第四十一 | 第四十二 | 第四十三 | 第四十四 | 第四十五 | 第四十六   | 第四十七  | 第四十八 | 第四十九 | 第五十  | 第五十一 | 第五十二 | 第五十三 |
| 聯盟章  | サバー章 | 天使章  | ヤー・スイ、 | 整列者章 | サード章 | 隊伍章  | 信者章 | 解説章  | 商議章  | 金飾章  | 煙氣章  | 跪坐章  | アハカラーフ | マホメット | 勝利章  | 内房章  | カーフ章 | 散布者章 | 山岳章  | 星辰章  |

二章



|      |      |      |      |      |     |      |      |      |      |      |      |      |      |      |     |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|
| 第七十五 | 第七十六 | 第七十七 | 第七十八 | 第七十九 | 第八十 | 第八十一 | 第八十二 | 第八十三 | 第八十四 | 第八十五 | 第八十六 | 第八十七 | 第八十八 | 第八十九 | 第九十 | 第九十一 | 第九十二 | 第九十三 | 第九十四 | 第九十五 |
| 無花果章 | 開胸章  | 午前章  | 暗夜章  | 黎明章  | 國土章 | 至高者章 | 夜來者章 | 望樓章  | 分散章  | 減量者章 | 分裂章  | 摺疊章  | 贅蹙章  | 抽出者章 | 消息章 | 神使章  | 復活章  | 人間章  |      |      |

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

第九十六 第九十七 第九十八 第九十九  
第一百一十一 第一百一十二 第一百一十三 第一百一十四

|   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人 | 類 | 章 | アブー・ | 不 | 信 | 者 | 章 | 潤 | 沢 | 章 | 布 | 施 | 章 | 巨 | 象 | 章 | 競 | 多 | 章 | 打 | 擊 | 者 | 章 |   |   |
| 暁 | 天 | 章 | 一    | 独 | 一 | 章 | 章 | 章 | 章 | 章 | 章 | 章 | 章 | 午 | 後 | 章 | 戰 | 馬 | 章 | 明 | 証 | 章 | 稜 | 威 | 章 |
| 人 | 類 | 章 | アブー・ | 不 | 信 | 者 | 章 | 潤 | 沢 | 章 | 布 | 施 | 章 | 巨 | 象 | 章 | 競 | 多 | 章 | 打 | 擊 | 者 | 章 |   |   |
| 類 | 人 | 章 | アブー・ | 不 | 信 | 者 | 章 | 潤 | 沢 | 章 | 布 | 施 | 章 | 巨 | 象 | 章 | 競 | 多 | 章 | 打 | 擊 | 者 | 章 |   |   |
| 類 | 人 | 章 | アブー・ | 不 | 信 | 者 | 章 | 潤 | 沢 | 章 | 布 | 施 | 章 | 巨 | 象 | 章 | 競 | 多 | 章 | 打 | 擊 | 者 | 章 |   |   |

五  
族  
章

SAM  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

文語訳

古

蘭

(ヨーラン)

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

大川周明 訳・註釈

## 凡例

一、本書の原本は大川周明訳註『古蘭』（一九五〇年二月十五日、岩崎書店刊行）である。底本には一九五一年三月十日発行の再版本を使用した。

一、原典の書名は単に「古蘭」であり、「文語訳」の文言は、現在における本書の特徴を示すために本版刊行所が加えた角書<sup>カタカタ</sup>である。「（コーラン）」の読み仮名添え書きも本版刊行所が加えたものである。

一、本書において漢字は新字体の標準字体を使用するが（原本は基本的に旧字体が使用されている）、原本が古書としても入手困難なものである事情に鑑みて、原本記述の再現、原典の保存を主旨とする立場をとりつつ、次のような表記方針を採用した。

一、仮名遣いは一切を原本の通りとした（原本は古い仮名遣いが使用されているが、いわゆる正しい歴史的仮名遣いで全面的に統一されているものではない）。片仮名綴りにおける拗音・促音等の表記として右寄せ小字が使用されているが、これは原本の通りである（ルビの片仮名に右寄せ小字は使用されていない）。

一、訳者大川による註釈の部分は字下げ組みとすることを以て訳文と区別した。

一、本文行内の節番号は目立つように▲印を添えて記した（原本ではそなつておらず、単に漢数字が明朝体の小さく平たい字で記されている。なお翻訳の関係で節番号の順序が前後しているところがある。

節番号が4・5・6・8・9のように不連続であつたり4・5・6・6・7・8のように重複している箇所には（原本不連）（原本重複）のように註記し、4・5・6・6・8・9のような場合は二度目の6を7にす

るようにして訂正し、5・6・6・7・9のような場合には5・6・7・8・9のように訂正した。

一、訳註は番号ごとに改行した（原本ではそなつていらない）。原本では本文の註番号は括弧で括られては

いないが、これは註本文の番号が括弧で括られているのに揃えて括弧で括った。本文の註番号が語句の先頭文字についている場合と語句の末尾文字についている場合があるが、これは原則として原本のままとした（字と字の中間にについているものもあるが、これには適当に対処した）。原本では本文に註番号が抜けている箇所がかなり多数あるが、明らかに特定できる場合は補い、特定しかねる場合は註の冒頭に〔本版に  
ヒキ〕と註記した。なお、原本において註番号の括弧が（）ではなく【】である箇所が約3%の割合で見られるが、使い分けの意図は記されておらず、使い分けの事情も察しきれないので、全て（）に統一した。但し、原典保存上の配慮から、（1）の如く、註番号閉じ括弧の左横に小さく・を記すことを以て、【】が使用されている箇所を示した。

一、読み仮名ルビは原本にあるものをそのままに再現し、本版において加えたものはない。「」で括ったルビは本版において補った校訂上の註記である。「ママ」は原本のママの意味であり、「欠」は欠字の意味であり、「」はそこにあって然るべき『』を表示。誤植と目されるおそれのある極く難読用法の漢字についてのみ「」括りのルビで例外的に読み仮名を記した。（）括りの行内二行割註も本版において加えた校訂上の註記である。

一、原本は誤植少なからぬ版であるので、きわめて明らかな誤植（誤記・誤字・脱字）については本版において訂正した。明らかな誤植であっても正しい字を定めかねる場合は訂正せずに「ママ」のルビを書き添えてある（正誤を判断しかねる場合、誤りとはいえないが不適切な記述の場合、あえて直すまでもなからう場合も同じく「ママ」のルビを添えた）。ロッドウェル／ロッドウェル、記憶／記憶の類の表記ゆれはそのままにした。ローマ字綴りに疑問のある箇所も原則的にそのままとし、印刷不明瞭なものは形の最も近い記号で表記した。なお、原本ではアンダイング「」で記されているが、本版では「」を使用した。

SAMPLE  
Shoshin-su.com

## 序

ゲーテはその West-Oestlicher Divan に於て、古蘭について下の如く言へり——『吾等此書に対する毎に、初めは常に嫌惡の情を抱かしめるも、そはやがて吾等の心を惹き、吾等を驚かしめ、遂に敬意を払はしむるに至る。……その格調は内容と目的とに相応して厳肅・雄渾・激越に、一貫して實に莊嚴なり。……かくて此書は百世を通じて最も強力なる感化を及ぼし往くべし』と。近代精神の最も洗練せられたる、且最も健康なる体现者ゲーテをして、その当初読みたる時に抱ける嫌惡の情を、驚異と嘆賞とに変らしめたる此の書籍は、人間精神の驚くべき所産といふべく、切実に世界と人生とを考察する人の至心の関心を惹くに足るものといふべし。

マホメットに親灸し得ざりし初期信者らは、アーライシャを初め彼の諸未亡人に向ひ、最も熱心に予言者の為人について質問するを常とせり。而してアーライシャは、是くの如き質問を受くる毎に、常に下の如く答へたりと伝へらる——『汝等は古蘭を有するに非ずや。汝等はアラビア人にしてアラビア語を解するに非ずや。然るに汝等は何故に予言者の為人について訊ぬるか。げに古蘭は直ちに予言者の為人に非ざるか』と。

まことにアーライシャの言の如く、古蘭は即ちマホメットなり。古蘭の偉大は、此書が曾て地上に呼吸せる最大なる偉人の一人の性格並に生活を最も忠実に反映するが故にして、ビュффォンが『文は人なり』と言へるは、古蘭の場合に於て無比に適切なり。カーライルが言へる如く、古蘭の長所は『あらゆる意味に於て真摯なるこ

SAMPLE Shinsui.com

と』に存す。即ち古蘭を貫き流るるものは、真摯なるマホメットの生命なり、その真理を追ひ求めて止まざる熱意なり、万難を排して其の把握せる真理を護持せんとする勇猛心なり、而して聴くを欲せざる聴衆に向つて其の把握せる真理を伝へんとする不退転の堅忍なり。而して古蘭の一言一句は、悉く一千三百余年以前にマホメット自身の口より出でたるを如実に今日に伝へたるものなり。此の一事がのみを以てするも、古蘭は世界文学史上の希有なる文献なり。

而も古蘭は決して單なる古典に非ず、實に三億回教徒の聖經として、現にその宗教的・道徳的・社会的生活を規定するものなるが故に、尋常の文献を以て之を目すべきに非ず。従つて最も望ましき古蘭の日本語訳は、アラビア語に精通し、日本語に熟達せる敬虔なる回教信者にして初めて之を能くすといふべし。例へば仏典の漢訳が鳩摩羅什乃至玄奘三蔵の如き巨匠に待てるが如し。加ふるに古蘭は、もと決して読者のために書かれたるものに非ず、最初より最後まで聴者のために讀誦せられたるものなるが故に、文章としては未完成にして、マホメットの身振乃至音声の抑揚によりて文意を補へる個處あり、また内容は無味乾燥なるも、ネルデケの謂はゆるアラビア語の『異常なる自由と力 Die ungemeine Freiheit und Kraft』によつて、切実なる印象を聴者に与ふるものなるが故に、之を外國語に翻訳してアラビア語の有する音調に伴ふ魅力を彷彿せしむるが如きは、殆ど不可能事に属すといふべし。例へば、メヂナ諸章の如き、マホメットが現実の政治的支配者たり且立法者たる間に接受せる啓示なるが故に、諸節の多くは之を外國語に翻訳すれば、甚だ平板無味なる法律乃至規則の制定にすぎざるも、アラビア語によつてマホメットが之を朗誦せる時は、強く聴者の耳に響き、深く其胸に徹せるが如し。

予は回教信者に非ず、またアラビア語の知識は貧弱なるが故に、訳者としての資格を欠くこと言を俟たず。唯だ大学に宗教学を修め、深甚なる興味を回教に抱き初めてより、其間断続ありといへども、今日に至るまで未だ曾て其の研究を廃せず、存分にアラビア語によつて古蘭の醍醐味を色読するを得ずとするも、その伝ふる

ところの精神は略ぼ之を領会するを得たり。偶々松沢病院に閑日月を得て古蘭を繙くに及び、意荐りに動くに任せて其の訳註に着手し、昭和二十一年初春に稿を起し、同二十三年初冬に至る約二年の間に成れるもの即ち是なり。訳出に当りては普く漢英仏独の諸訳を参考せり。予は此の訳註が、完全なる和訳古蘭の出現を促す陳勝吳広たることを以て満足するものなり。

昭和二十四年十二月

大川周明

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

## 古蘭について

### — 古蘭の成立 —

古蘭即ちアルクラーン Al-Qur'ān は読誦・復誦又は暗誦の意味にして回教徒の經典の呼称なり。そはアルラーハがマホメットに降せる啓示の集録にして、神意を彼に伝へたるは天使ガブリエルなりとせらる。即ちガブリエルが神意を奉じて隨時マホメットに默示し、マホメット之を復誦し、然る後に之を信者に向つて誦出せるものなり。従つて古蘭は悉くアルラーへの言にして、語るところの者は即ちガブリエルなり。是くの如き経験は、之を旧約の予言者の場合にも見る。天來の靈感其胸に満つる時、人間の個我は其影を潜め、語る者は即ちエホバなり。但し旧約の予言者の場合は、暫くエホバに語らしめる後、また吾に帰りて自ら語るを常とす。マホメットは即ち然らず。彼は徹頭徹尾ガブリエルをして語らしめ、己れは唯だ一個の受話器として終始したり。マホメットが文字を知り居たるか否かについては学者の間に定説なし。マホメット自身は自ら『無字の予言者』と唱へ、默示を受くるまで読むことも書くことも知らざりきと言ひ、且彼自身が何ものをも書残さざりしことは殆ど確実なり。但しネルデケは、マホメットは必ずしも全く文盲たりしに非ず、唯だ書くことに慣れざりしため、筆録を必要とする場合は他人を煩はしたるならんと推測せり。いづれにもせよ古蘭の諸節は、総じてマホメットが誦出せるものを彼の信者が筆写し又は暗誦せるものなり。

当時既に国際商業都市なりしメッカには、文字を知れる者多く、彼の最初の信者なりし妻カディージヤ、ワラカ、アリー、アブー・バクルなど、皆な読み且書くことを能くせりと言はる。従つて古蘭の諸節は当初より暗記せらるると共に筆録せられたりとすべく、そのために古蘭は早くより経典即ち『書物 AlKitâb』と呼ばれたり。例へばメッカ初期の啓示なる第五六章第七七—七九節には『こは高貴なる古蘭なり、そは載せて秘蔵の書冊にあり。淨められたる者に非ずば、何人も之に触るを得ず』とあり、また当初最も猛烈なるマホメットの迫害者なりしウマルが、翻然として彼に帰依するに至れるは、其妹が所持したるター・ハー章を一読して深甚なる感激に打たれたりしによると伝へらるるを見ても、当時既に多くの信者が筆写せる古蘭を所持せるを知るべし。而してマホメットがメヂナに遷りて後は、ウバイ・イブン・カーブ Ubâi ibn Kâ'b が彼の常任書記たりし外に、二十四人乃至四十八人の書記ありしとせられ、其中には後に古蘭結集の重任を負へるザーアード・イブン・サービット Zâid ibn Sâbit もあり。従つてマホメットが予言者としての二十三年間、不斷に黙示せられたる古蘭の諸節は、其の生前に於て全部筆録せられたるものとすべし。

而も古蘭は決して筆写によりてのみ保存せられたるに非ず、実に信者の脳裡に保存せられたり。記憶はアラビア人にとって最も安全なる知識の貯蔵庫なりき。彼等は殆ど信ずべからざる記憶力の所有者として、古より長文の詩歌乃至系譜の暗記に慣れ来れるが故に、マホメットの場合に於ても彼等は啻に彼が復誦せる啓示を筆写せるのみならず、直ちに之を彼等の脳裡に印刻せり。蓋し古蘭の諸節は、彼等のために啻に宗教的・道徳的並に社会的規範たるのみならず、そは實にアルラーへより出でたるものとして、一言一句悉く至高至貴なる恩賜なるが故に、之を己れのものとすることは、彼等にとって大なる榮譽なると共に大たる歓喜なりき。かくてマホメットの信者は、新たなるアルラーへの言が彼の口を通じて伝へらるる毎に、宛も新しき生命を鼓吹せられたるが如く感じ、争ひて之を暗誦するに努めたり。而してマホメット自身も古蘭の暗誦を奨励し、多くの章节を記憶せる者に対して特別の眷顧を与へたり。例へば公の礼拝を指導する導師の役目は、最も多く古蘭を暗

誦せる者が之を勤むるを常とせる如き、又は戦利品さへも一応律法に従ひて分配を了へたる後、彼等に對して余分の贈与を行へるが如き即ち是なり。かくてマホメット生前に於て四人又は五人の篤信者は古蘭全部を、其他の数人は殆ど全部を暗誦せりと伝へらる。

## 二 古蘭の結集

さて古蘭の全部又は大部分が信者によつて筆写せられ又は記憶せられたりとするも、筆写せられたる断簡零墨は未だ一巻として纏められたるに非ず、而してマホメットの死後も其体に放任せられたり。

然るにアブー・バクルが虚偽の予言者ムサイリマ討伐の軍を起すや、ヤママーの役に於て回教徒の死傷夥しく、戦死者のうちには多くの古蘭暗誦者を算へたり。而も戦争は向後も頻発すべくその都度古蘭暗誦者は陣歿し行くべし。長老尚ほ存生の間に、諸處に散在せる古蘭筆写の断片を集め、之を一巻の經典に結集する必要を感じたるウマルは、此事をアブー・バクルに勧めて之を決意せしめ、アブー・バクルは直ちに之をザーヴィド・イブン・サービットに命じたり。

ザーヴィドは此事を以て山を動かすよりも困難なる大業なりとして容易に承諾せざりしが、遂に説得せられて結集に着手したり。此際ウマルは、マホメットより直接に啓示を聴聞し、且之を彼の面前にて筆録せるものみをザーヴィドに提出すべきことを命じ、且その眞実を立証する二名の証人あることを条件とせり。ザーヴィド曰く『予は古蘭を探し求めたり。予は之を椰子葉、石盤、乃至人間の脳裡より集めたり。最後に予は輔士の一人アブー・クザイマ Abu Khuzaima が、懺悔章の末尾数節を所持せるを発見せり。此等の数節は他の何人も之を所持せざりしなり』と。蓋し懺悔章の末尾数節は、多数の暗誦者ありしかど、之を筆写せるものを発見するまで、ザーヴィドは之を古蘭中に集録せず、最後に之を発見して結集を終へたるなり。之を以て観るも現在の古蘭諸章は、最初の結集當時既に悉く筆写せられたるものなることを知るべし。

ザーリドによつて結集せられたる古蘭が、アブー・バクル並にウマルを初め、当時の諸長老に充分なる満足を与へたりしことは、之に対して如何なる異存も唱へられざりしことによつて推察せらる。果して然らば古蘭諸章の題名並に前後の次序も、またマホメット生前に於て定まり居たりとするを至当とす。また古蘭の如き長篇を悉く暗誦するためには、諸章に一定の順序あるを必要ともすべし。然るに古蘭諸章の序列は、主として章の長短によれるものにして唯だ長章を前にし、短章を後に置けるにすぎず、年代の順序あるに非ず又は前後に内容の聯絡あるに非ず、極めて外面的又は器械的なる排列なり。而して回教学者のうちには、是くの如き順序はマホメット自身によりて、一層精確にはアルラーハの啓示によりて定められたるものにして、深奥なる内面的統一を有すと言ふ者あるも、その具体的説明は未だ万人を首肯せしむるに足らざるなり。

此の古蘭最初の原典は、先づアブー・バクル之を護持し、その死後はウマル、ウマルの死後は彼の女にしてマホメット諸妻の一人なりしハフサ Hafsa 之を護持したり。恐らく此の原典によつて幾多の複本作成せられ、信者の間に配布せられしなるべし。

然るにウスマーンのカリーファ時代（西紀六四四—六五六六年）に至り、アルメニア及びアゼルバイジャン遠征軍を率ゐたるホザイファアが、此等の地方に於て古蘭説誦が極めて区々なるを知り、驚き且憂へて其の統一の必要をウスマーンに進言せり。よつてウスマーンはハフサより其の護持せる古蘭原典を借受け、ザーリド・イブン・サービット及びクライシュ族の長老三人に命じ、更めて原典によつて複本を作成せしめたり。而してウスマーンは、若し古蘭の発音に関してザーリドと三長老との間に異論を生じたる場合は、必ずクライシュ族のそれによるべしと訓示したり。蓋しザーリドはメヂナ人なるが故に、アラビア語の発音に於てクライシュ族のそれと相異あるべきを慮れるなり。かくて此の第二の結集は、古蘭の用語をマホメット自身の言語即ちメッカ方言に統一せるのみにて、内容其者には何等の変更を見ざりしなり。

かくして成れる新しき古蘭原典は、永く之をメヂナに奉藏することとし、三個の複本を作成して之をダマス

ユ、クーファ、バスマの三陣営に送致し、同時に悉く自余の複本を破毀せしめたり。而してウスマーンの命令によつて結集せられたる古蘭は、爾來如何なる添加も削除もなく、全く當時其仮に今日に伝へられたり。従つて其の一言一句は、悉く千三百年以前にマホメット自身の口より出でたるものにして、實に世界文学に於ける稀有の文献といふべし。

古蘭は百十四の『章Sūra』より成り、各章は『Ayat』より成る。章の原語スーラは列又は序列を意味し、節の原語アーヤットは本来見聞し得る表徵を言ひ、古蘭中に最も頻出する語にして、予は之を『休徵』と訳した。天啓・奇蹟等皆なアーヤットにして、古蘭の諸章また最も高貴なる啓示又は休徵なるが故に之をアーヤットと名づけたるなり。而して章によつて甚だしく長短あり。其の最も長きは第二章にして二百八十二節より成り、最も短きは第百三章・第百八章・第百十章にして、共に僅に三節より成る。

古蘭はまた三十の『部Juz』に分たれ、部は更に『課Rukū』に小分せられる。之を三十部に分てるは、ラマザーン月に毎日一部づつ読誦して、一月中に全部を終る便宜によるものにして、全く器械的なる区分なり。されど回教徒は其の文献に古蘭を引照するに当り、章と節とによらず、常に部と課とによる。

### 三 古蘭誦出の年代

マホメットはメッカ及びメヂナに於て啓示を受けたるが故に、古蘭各章は劈頭に啓示接受の場所を記せり。従つて古蘭は其の受啓の地によつて之をメッカ期並にメヂナ期のものに大別せらる。而してメヂナに於けるマホメットの地位は、其の故郷メッカに於て占めたる地位と甚だしく相異なる。メッカに於ける彼は常に迫害せられたる伝道者なりしが、メヂナに於けるマホメットは当初より強力なる党派の指導者にして、次第に其の勢力を拡大して遂に全アラビアの独裁者たるに至れり。之をメッカに於ける微力なる新宗教団体の輕蔑せられ攘斥せられたる教師時代に比すれば正に雲泥の差ありと言ふべし。此の地位と環境との相違は最も明白に古蘭に

反映せり。

古蘭諸章を啓示接受の年代に順つて排列することは、マホメットの信仰の発展を明かにする上に於て極めて重要なことなると同時に、甚だ困難なる研究に属するが故に、学者の間に異説あるは当然といふべし。メヂナ諸章は其の歴史的背景が略ぼ明かなるため、啓示接受の年代も自ら推定し易しといへども、メッカ諸章に至りては若干のものを除けば、其の前後を定むること決して容易ならず。但し其の内容並に格調によつて、之を数個の期間に分つことは固より不可能に非ず。グスターフ・ワイルがメッカ時代を三期に分ち、メヂナ諸章を三群に分ちて其の理解を容易ならしめてより、多くの学者また之を試みたり。就中サー・キリアム・ムイアの排列、最も当を得たりと信ずるが故に、左に之に拠つてメッカ諸章を年代順に五群に分つべし。

第一はマホメットが深刻なる宗教的自覚を体験し始めたる最も初期のものにして、一〇三・一〇〇・九九・九一・一〇六・一・一〇一・九五・一〇二・一〇四・八二・九二・一〇五・八九・九〇・九三・九四・一〇八の十八章なり。

第二はマホメットが新しき信仰の宣伝を覺悟せる当初のものにして、九六・一一三・七四・一一一の四章なり。

第三は宣教開始よりアビシニア避難に至る期間の啓示にして、八七・九七・八八・八〇・八一・八四・八六・九〇・八五・八三・七八・七七・七六・七五・七〇・一〇九・一〇七・五五・五六の十九章なり。

第四は宣教六年より十年に至る間の啓示にして、六七・五三・三二・三九・七三・七九・五四・三四・三一・六九・六八・四一・七一・五一・五〇・四五・三七・三〇・二六・一五・五一の二十一章なり。

第五は宣教十年よりメヂナ移住に至る期間のものにして、四六・七二・三五・三六・一九・一八・二七・四二・四〇・三八・二五・二〇・四三・一二・一一・一〇・一四・六・六四・二八・二三・二三・二一・一七・一六・一三・二九・七・一一三・一一四の三十章。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsu.com

古蘭について

| 原典 | ジャラール・ディン | ロッドウェル | 原典  | ジャラール・ディン | ロッドウェル |
|----|-----------|--------|-----|-----------|--------|
| 1  | ?         | 8      | 58  | 105       | 106    |
| 2  | 86        | 91     | 59  | 101       | 102    |
| 3  | 88        | 97     | 60  | 90        | 110    |
| 4  | 91        | 100    | 61  | 110       | 98     |
| 5  | 112       | 114    | 62  | 108       | 94     |
| 6  | 54        | 88     | 63  | 104       | 104    |
| 7  | 38        | 97     | 64  | 109       | 93     |
| 8  | 87        | 95     | 65  | 108       | 101    |
| 9  | 113       | 113    | 66  | 107       | 109    |
| 10 | 50        | 84     | 67  | 76        | 63     |
| 11 | 51        | 75     | 68  | 2         | 17     |
| 12 | 52        | 77     | 69  | 77        | 42     |
| 13 | 95        | 90     | 70  | 78        | 47     |
| 14 | 71        | 76     | 71  | 70        | 51     |
| 15 | 53        | 57     | 72  | 39        | 62     |
| 16 | 69        | 73     | 73  | 3         | 3      |
| 17 | 49        | 67     | 74  | 4         | 2      |
| 18 | 68        | 69     | 75  | 30        | 40     |
| 19 | 43        | 58     | 76  | 97        | 52     |
| 20 | 44        | 55     | 77  | 32        | 36     |
| 21 | 72        | 65     | 78  | 79        | 37     |
| 22 | 103       | 107    | 79  | 80        | 35     |
| 23 | 73        | 64     | 80  | 23        | 24     |
| 24 | 102       | 105    | 81  | 6         | 32     |
| 25 | 41        | 66     | 82  | 81        | 31     |
| 26 | 46        | 56     | 83  | 85        | 41     |
| 27 | 47        | 68     | 84  | 82        | 38     |
| 28 | 48        | 79     | 85  | 26        | 28     |
| 29 | 84        | 81     | 86  | 35        | 22     |
| 30 | 83        | 74     | 87  | 7         | 25     |
| 31 | 54        | 82     | 88  | 67        | 38     |
| 32 | 76        | 70     | 89  | 9         | 39     |
| 33 | 89        | 103    | 90  | 34        | 18     |
| 34 | 57        | 85     | 91  | 25        | 23     |
| 35 | 42        | 86     | 92  | 6         | 16     |
| 36 | 40        | 60     | 93  | 10        | 4      |
| 37 | 55        | 50     | 94  | 11        | 5      |
| 38 | 37        | 59     | 95  | 27        | 26     |
| 39 | 58        | 80     | 96  | 1         | 1      |
| 40 | 59        | 78     | 97  | 24        | 92     |
| 41 | 60        | 71     | 98  | 99        | 21     |
| 42 | 61        | 83     | 99  | 92        | 30     |
| 43 | 62        | 61     | 100 | 13        | 34     |
| 44 | 63        | 53     | 101 | 29        | 39     |
| 45 | 64        | 72     | 102 | 15        | 14     |
| 46 | 65        | 88     | 103 | 12        | 27     |
| 47 | 94        | 96     | 104 | 31        | 13     |
| 48 | 111       | 108    | 105 | 18        | 19     |
| 49 | 106       | 112    | 106 | 28        | 20     |
| 50 | 33        | 54     | 107 | 16        | 15     |
| 51 | 66        | 43     | 108 | 14        | 9      |
| 52 | 75        | 44     | 109 | 17        | 12     |
| 53 | 22        | 46     | 110 | 101       | 111    |
| 54 | 36        | 49     | 111 | 52        | 11     |
| 55 | 96        | 48     | 112 | 21        | 10     |
| 56 | 45        | 45     | 113 | 19        | 6      |
| 57 | 93        | 99     | 114 | 20        | 7      |

而してマイアは自余のメヂナ諸章を下の如き年代に排列す——九八・一・三・八・四七・四二・五九・四五八・四五・四三・二四・三三・五七・六一・四八・六〇・六六・六九・九。  
 左に参考のため回教学者の最初の古蘭諸章年代排列者たるジャラール・ディンのそれと、ロッドウェルのそれとを表示すべし。ネルデケの排列は殆どロッドウェルに同じ。蓋しロッドウェルはネルデケの研究に基き、自家の所見によつて若干の訂正を加へたるものなり。

附  
言

一、古蘭各章の節の区分は、原典によりて多少の出入あり、本書はトルコ・エジプト・印度・中国等のスンナ派回教徒の間に行はるるトルコ版アラビア原典のそれに依る。

一、アラビア文字のローマ字化は次表に依る。

(判然としない點は、本版で採用するが宜い)

| Arabic. | Names. | Roman. |
|---------|--------|--------|
| ا       | Alif   | A      |
| ب       | Bā     | B      |
| ت       | Tā     | T      |
| ش       | Şā     | S      |
| ج       | Jim    | J      |
| ه       | Hā     | H      |
| خ       | Khā    | Kh     |
| د       | Dāl    | D      |
| ز       | Zāl    | Z      |
| ر       | Rā     | R      |
| س       | Zā     | Z      |
| ش       | Sin    | S      |
| س       | Shin   | Sh     |
| س       | Sād    | S      |
| ز       | Zād    | Z      |
| ت       | Tā     | T      |
| ز       | Zā     | Z      |
| أ       | 'Aīn   | '      |
| غ       | Għain  | Għ     |
| ف       | Fā     | F      |
| ق       | Qāf    | Q      |
| ك       | Kāf    | K      |
| ل       | Lām    | L      |
| م       | Mīm    | M      |
| ن       | Nūn    | N      |
| ه       | Hā     | H      |
| و       | Wau    | W      |
| ي       | Yā     | Y      |
| ف       | Fathah | a      |
| ك       | Kasrah | i      |
| ز       | Zammah | u      |
| ه       | Hamzah | ্      |

SAMPL  
Shoshi

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

古

蘭

(上)

第一章より第二十章まで

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

# 第一開經章

メッカ啓示

古蘭の卷頭にあるを以て開經章 *Fâtiḥatūn-Kârâb* と名づけられ、また単に開卷章 *Al-Fâtiḥah* と呼ばれる。古蘭中の最も重視せらるる一章にして、礼拝章・祈禱章・讚美章・十全章・珠玉章及び其他の莊厳なる名称を与へられ、日々五時の礼拝に際して必ず之を誦するのみならず、公私一切の契約又は取引は、之を唱へば完からずとせられ、且誦し了れば必ずアーメンと唱ふ。古蘭第一五章第八七節に『屢々誦誦せらるる七節』とあるは、本章を指せるものとせられ、初期のメッカ啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーザの名によりて<sup>(1)</sup>

アルラーザを讚へよ、そは三界の主<sup>(2)</sup> 大悲者・大慈者<sup>▲</sup> 審判の日の執権者なり<sup>▲</sup> 吾等汝に事へ、佑助を汝に求む<sup>▲</sup> 吾等を直き道に導け<sup>▲</sup> 汝が恩寵を垂れる者<sup>▲</sup> 汝の怒に触れず、また迷はざる者の道に<sup>(4)</sup> ▲<sup>7</sup>

(1) 第九章を除く古蘭の各章は、悉く此の唱名 *Bismillah* を以て始まる。大悲者 *Ar-Rahmân*、大慈者 *Ar-Rahîm* は、その具足する徳性によるアルラーザの呼称にして、之を『尊称 Al-Asmâ'u'l-husnâ』と謂ひ、総じて九十九を算ぶ。古蘭第七章第一七九節に『アルラーザに諸の尊称あり。故に之を以て彼を呼べ』とあるが故に、信者は常に此等の尊称を以てアルラーザに呼びかく。例へば赦免を求むる場合は『罪障払拭者 Al-'Afâ'ûl よ』又は『允饑悔者 Ar-Tauwâb

よ』と呼び、加護を求むる場合は『守護者 Al-Muhiimīn よ』又は『佑助者 Al-Walī よ』と呼ぶが如し。大悲者・大慈者は等しく同一語根より出でたるものにして、殆ど同意義なれども、回教神学者は前者を以て一切衆生に対する普遍的なる愛、後者を以てその善行の故を以て恩寵に値する者に対して注がる愛と解す。而して『大悲者 Ar-Rahmān』はアルラーへのみに限らるる尊称にして、自余の何者をも此の名称を以て呼ぶことを許さず。

(2) 三界の原語は『諸世界·Alāmin』なるが、此処にては天使・幽鬼・人間を総称せるものとせらるるが故に三界と訳したり。尚ほ古蘭中に此語は一切衆生・宇宙万有・人類全体又は万国万民の意味に用ゐらる。『主』の原語は Rabb にして、本来養育者又は育成者の意味なれば、日本語の主人と同じからず。漢訳は調養之主又は養主となす。

(3) 執權者の原語は Mālik にして支配する権力又は处分する権力を所有する者を意味す。英訳に King とあるは Mālik と Mālik と混同せるものなるべし。

(4) 第七節は『汝の怒に触れ、また迷へる者の道に導く勿れ』とも訳し得べし。但し此處にて『怒に触るる者』を猶太人、『迷へる者』は基督教徒を指すとする解釈は首肯し難し。マホメットが猶太人並に基督教徒に対して積極的非難を加へ始めたるはメヂナ遷都以後、回教の独自性を確立してよりのことなるが故に、メッカ初期の啓示に属する本章に於ては、神怒に触るる者並に迷へる者は、一般的意味に之を解釈するを妥当とすべし。

SAMPLE  
Shoshi-Shinri.com

## 第二 牝牛章 メヂナ啓示

第六七一七一節にモーゼが猶太人をして牝牛を神に供へしめたる経緯を述ぶるに因みて牝牛章 Al-Baqarah と名づけらる。メヂナ遷都以後最初の三年間の啓示にして、其の大部分はバドル Badr 会戦以前即ち遷都以後一年有半に於けるものとせらる。本章の前半は主としてメヂナの猶太人並にメヂナ市民中の謂はゆる『偽信者 *Munāfiqun*』を対象とするものなるが故に、当時のメヂナに於ける此等両者の事情並に両者とマホメットとの関係を略述して、本章の歴史的背景を明かにすべし。

メヂナはもとヤスリブ *Yasrib* と呼ばれ、メッカの北約百哩の地にあり、北方に向つて緩く傾斜する平野に位し、水に豊富なることに於てアラビア稀有の地なり。南より北に向ふ多くの河谿あり、ザガーバ *Zaghâba* に於て合流し、イダム *Idam* 河谿に注ぎて海に繕ふ。河谿に水あるは降雨の後に限らるるも、井を掘りて容易に水を得らるるが故に、夙くより農耕行はれ、棗椰子樹園の繁茂を見たり。されどヤスリブの起原並に其の最古の歴史については、精確なる何事も知られ居らず、やや確實に知り得るは猶太人が此地に定着してよりのことなるが、彼等が最初に南下し来れる年代も明かならず、唯だ西紀第一世紀頃よりナヅィール *An-Nazir*・クライザ *Quraiza*・カイヌカー *Qainuqa* の三猶太部族が、此地一帯に定着して次第に繁榮し、堡壘を築きて自ら護り居たりしことを知り得るのみ。然るに其後ヤマン *Yaman* に於けるマリブ *Marib* 貯水池の崩潰による南アラビア人の北方移住が開始せらるるに及び、

アウス Aus 及びカズラジ Khazraji の両族此地に來りて土着し、当初長く猶太人支配下に置かれしが、第五世紀末葉に至り、彼等に代つてヤスリブの霸權を握るに至れり。彼等は從来猶太人が占拠せる諸堡壘を略取せるのみならず、若干の堡壘を新設して防備を厳にし、両族のうち優勢なりしかズラジ族が主權を握りて居を市の中央に占め、アウス族は其の南部及び東部を占めたり。而して此等両族以外に、彼等の北上以前より此地に住み、永年に亘る猶太人との接触により、多かれ少なかれ猶太化せられたる若干のアラビア諸族もありき。而してナヅィール・クライザ両猶太部族はアウス族の下に、カイヌカー族はカズラジ族の下に、或る程度の独立を保有しつつヤスリブの周囲に生活したり。

かくしてヤスリブの状態は、アラビア人制覇の下に一旦平和に落着せしが、幾くもなくしてアウス・カズラジ両族の間に権力の争奪を生じ、猶太人の三部族並に他のアラビア諸族また此の党争に加はり、角逐は次第に激化して、遂に西紀六一六年即ちマホメットの開教第六年、ボアース Bo'as に於て干戈を交ゆるに至れり。而して此の激戦はアウス族の勝利に歸したるも、カズラジ族は決して屈辱に甘んずることを欲せず、両派の対立は依然として継続し、市民は甚だしき不安の間に日を送りしが、遂に多年の党争に倦み、カズラジ族の最も有為なる領袖アブダラー・イブン・ウバイ Abdallah ibn Ubai を推してヤスリブの首長となし、以て統一と平和とを実現せんとするに至れり。

さて伝承によれば、ヤスリブ市民とマホメットとの関係は、三段階を経て急速に進めるものなり。西紀六二〇年即ち開教第一〇年に於て、マホメットは最大の慰藉者たりし愛妻カディーヤ Khadija を失ひ、月余にして更に最も信実なる保護者たりし伯父アブー・ターリブ Abū Tālib を失ひて窮迫其極に達し、伯父を葬りて半月ならざるに、遂に養子ザイド Zaid ibn al-Hāris を伴ひ、メッカと繁栄を争へるターアイフ Al-Ta'if に趣き、暫く身を此地に託して伝道に従はんとせしが、ターアイフ市民また彼を排斥し、石を乱擲して彼を放逐せる其年の参詣期に於て、若干のヤスリブ市民が参詣の序を以てマホメッ

トに至り、其教を聴きて大に欣び、直ちに其の信者となり、帰りて之をヤスリブ市民に告げたり。而して翌年の参詣期には、アウス、カズラジ両族の代表者十二名が、ミナー Mīnā に近きアカバ Aqaba 穏谷に於てマホメットと会見し、直ちに熱心なる彼の帰依者となり、名高き第一アカバ誓言を行ひてヤスリブに帰り、市民に向つて伝道を開始せり。而して市民の多くは欣んで之を信受し、アルラーへ並に其の使者マホメットに対する信仰は、実に異常なる速度を以て市民の間に弘まり、マホメットに向つて教師の派遣を求むるに至れり。而して翌六年の参詣期に至り、七十余人のヤスリブ市民が、再びアカバにマホメットと会見し、所謂第二アカバ誓言によつて彼のヤスリブに遷らんことを望み、生命を獻げて彼並に彼の信仰を護るべきことを誓へり。

是くの如くにしてメッカに於ける窮余の予言者は、此年有力なる都市の賓客としてヤスリブに遷り、ヤスリブは爾来マディーナト・アン・ナビー Madīnat an-Nabi 即ち『予言者の都』と呼ばれ、後には単にマディーナ Al-Madīnah 即ち『都』と呼ばれるに至れり。

されどメヂナ市民は当初より挙りてマホメットに帰依せるに非ず。彼等のうちには彼の宗教を信ぜず、また異族の出身者が突如として來りて勢力を彼等の上に揮ふを快しとせざる者あり、設ひ大勢に順応してマホメットに服従せるも、決して衷心より彼の信仰に帰依せるに非ず、寧ろ時到らば彼を失脚せしめんと企てたり。古蘭に於て屢々糾弾せらるる『偽信者 Muṇāfiqūn』は即ち彼等の一群を指せるものにして、其の首領は特にメヂナに君臨せんとしてマホメットのために其の地位を奪はれたるアブダラー・イブン・ウバイ其人なりき。さればマホメットが彼の不遜なる言動に忿懣の色を示せる時、メヂナ市民中の最初の帰信者の一人なるサード・イブン・ウバーダ Sa'd ibn 'Ubayda は『アルラーアが吾等に汝を遣はせる時、吾等はアブダラーのため既に冠冕を用意し居たりしなり。されば彼が汝を以て已れの掌中より王国を奪取せる者として怨恨を抱くは当然なり』と告げて、マホメットが彼並に

彼の一党に対するに寛容と忍耐とを以てすべきことを勧告せり。さればマホメットは彼等の意図を熟知せるが故に、屢々痛烈なる非難を彼等の上に加へたれど、概して異常なる寛大を以て彼等を遇し、専ら其心を得るに努め、他日其の勢力を完全にメヂナに確立したる後も、何等差別的に彼等を遇することなく、次第に彼等を教化して忠実なる信者たらしむるに至れり。

メヂナに於ける猶太人の処理は一層困難なりき。メッカ中期即ち開教第五年乃至第六年の啓示とせらるる古蘭諸章は、マホメットが此頃より猶太教並に基督教に対し深甚なる関心を抱き始めたることを示す。蓋しマホメットの最初の宣教は、アラビア人をして其祖アブラハムの純一なる信仰に復帰せしめんとするものにして、自余の宗教との関係については何等言及するところなし。然るにメッカ中期の古蘭諸章は、タルムードを典拠とする猶太人の伝承、並に南シリア及びアラビアに行はれたる異端基督教の伝承を叙する記事極めて多きを見る。但しマホメットは旧約又は新約聖書の原典又は其の一部について直接学ぶところありしに非ず、専ら之を伝聞せるに過ぎざりしが如し。而して彼が最も多くを学べるは實に猶太教にして、イスラームはアラビア化せる猶太教とも言ひ得るほど、猶太教の信仰並に儀礼を自己の宗教に採用したり。彼はモーゼの五書並にダビデの詩篇を以てアルラーへの降せる經典なりとし、天啓の經典を奉ずる故を以て猶太人並に基督教徒を『受經者 Al-Kirâb』と呼び、日曜を以て礼拝日となし、信者をして礼拝に際しては其面をエルサレムに向はしめた。此の礼拝して當面する方向を『朝向 Qiblah』と称す。さればマホメットのメヂナに遷るや、猶太諸部族と友好条約を結び、平等の市民権と信仰の自由とを彼等に与へ、其心を攬るに努めたりしが、少数の例外者を除けばマホメットを予言者と認むる者なかりしのみならず、多くは却つて彼を待つに輕侮と嘲笑とを以てし、メヂナの偽信者と相通じて彼の地位を顛覆せしめんと欲したるを以て、マホメットは遂に其の態度を一変し、先に定めたる規定を廢して金曜を礼拝日となし、信者の朝向をメッカに改め、茲に

猶太人と絶縁して、其の殲滅を期するに至れり。

メヂナに於けるマホメットの最初の仕事は、叙上の雰囲気の間に、礼拝並に集会の場処たる礼拝堂の建設並に宗教的儀礼及び諸規律の制定なり。を以て、本章の後半は之に關する啓示を以て満たさる。而して回教に於ては宗教と法律と道徳との分化を見ざるが故に、マホメットが宗教的導師たることは、同時に政治的首長たり且道徳的教師たることを意味す。従つてマホメットがメヂナに於て宗教的地位を確立せることは、直ちに其の政治的支配を伴へり。アブダラー・イブン・ウバイを中心とする一群のメヂナ市民が、マホメットに対して不平なりしは實に之がためなり。

### 大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ミーム・ラーム▲ こは疑惑を容れざる經典なり、<sup>(1)</sup> 其身を護る者の嚮導なり▲ 彼等は不可見のものを信じ、<sup>(2)</sup> 礼拝を守り、わが賜へるものにて喜捨を行ひ▲ わが汝に降せるもの並に汝以前に降せるものを信じ、且堅く来世を信ずる者なり▲ 此等の者は其主に導かる。彼等は本願成就せん▲

(1) 古蘭諸章のうち、その二十九章の劈頭に此種の単字あり。回教神学者は之を以て若干語の省略となし、種々なる解釈を試むるも竟に定説なし。一学者が言へる如く『此等の文字の真意は、唯だアルラーハのみ之を知る』とすべし。

(2) 『其身を護る』の原語は mutraqiにして、アルラーハの懲罰に對して其身を護る意味なり。英語にては常に God-fearing 又は pious と翻訳せらるるも、律法教たる回教に於ては、神罰を免るる必須の条件は『擬を守ること』又は『善事を行ふこと』なるが故に、純粹なる宗教的感情としての『敬虔』と同じからず。

(3) 『不可見者 Al-Ghaib』は古蘭中に頻出する語にして、復活・最後審判・楽園・地獄等々の超感覚的なるものを

指す。

(4) 『礼拝 Salât』は常に『祈禱』と訳せらるるも、回教に於て祈禱に相当するは Du'a にして、サラートはアルラーハを讃美する宗教的儀礼なるが故に、之を『礼拝』と訳するを妥当とする。

(5) 汝とはマホメット、汝に降せるものとは古蘭。

(6) マホメット以前にも多くの予言者が啓示を受けたりとせらる。此處にては其等の諸啓示のうち、モーゼの五書、ダビデの詩篇、及びイエスの福音を指せるものとせらる。

(7) 此の一句は古蘭中に頻出するものにして、『彼等は成功せん』又は『彼等は榮えん』と訳し得べし。但し成功又は繁栄とは現世に於けるそれに非ず、常に来世の幸福即ち楽園に入ることを意味す。

げに信ぜざる者は汝之を警むるも猶警めざるに同じ。彼等は信ぜざるべし▲ アルラーハは彼等の心と耳とを封じ、其目には被覆かかれり。彼等には重罰あり▲  
人々のうちに言ふ者あり『吾等はアルラーハと末日とを信ず』と、されど彼等は断じて信者に非ず▲ 彼等はアルラーハと信者とを欺かんとして、実は唯だ己れを欺くにすぎず、而も自ら之を識らざるなり▲ 彼等の心には病あり<sup>②</sup>、而してアルラーハは其病を重からしむ。彼等はその虚言のために痛刑を受けん▲<sup>③</sup> 人あり彼等に向つて『世を紊す勿れ』と言へば、彼等答へて曰く『吾等は和解者に外ならず』と▲<sup>④</sup> 呜呼、彼等自身こそ紊乱者に非ざるか。而も自ら之を識らざるなり▲<sup>⑤</sup> 人あり彼等に向つて『人々の信ずる如く汝等も信ぜよ』と言へば、彼等答へて曰く『吾等も愚人の信ずる如く信すべきか』と。嗚呼、彼等自身こそ愚人に非ざるか。而も自ら之を識らざるなり▲<sup>⑥</sup> 彼等、信者に遇ふ時は『吾等も信ず』と言ふも、去りて己れのサタン等のみと偕なる時は即ち曰く『げに吾等は汝等に与す。吾等は唯だ翻弄するのみ』と▲<sup>⑦</sup> アルラーハは彼等の翻弄に報い、暫くその背逆の中に当てなき彷徨を続けしめん▲<sup>⑧</sup> 此等の者は善導に代へて迷誤を購へるものなり。その取引は如何なる利益をも齎さず、また彼等は決して善導せらるることなし▲<sup>⑨</sup>

SAMSUNG  
Samsung.com

(1) 多くの註釈家は『人々』を以て猶太人を指すとなす。されど余はベルが解釈せる如く、此等の諸節は当初猶太人を対象とするものなれど、後に訂正を加へてメヂナの『偽信者』に向けられたるものとするを妥当なりと信ず。

(2) 古蘭中に偽信者は常に『心に病ある者』と呼ぶ。その病は恐らくマホメットの君臨に対する政治的不満よりも来る。

(3) 偽信者が回教徒と猶太人との間に介在して策謀せることを非難せられ、その目的は両者の和解にありと弁解せることを指せりとすべし。

(4) サタン等とは偽信者の首領又は偽信者同志を指すものとすべし。

譬ふれば彼等は火を点する人の如し。火点ぜられて四隅を照らす時、アルラーは其光を奪ひて彼等を黒闇の中に残し、之をして視ることを得ざらしむ▲七 彼等は聾者なり、啞者なり、盲者なり。されば彼等は転向することなし▲八 また譬ふれば黒闇と電雷とを包みて天より降る雨の如し。彼等霹靂を聞きて死を恐れ、指もて其耳を塞ぐ。されどアルラーやは不信者を囲繞す▲九 電火は殆んど彼等の目を奪ひ、彼等その一閃する毎に光の中に歩み入るも、黒闇彼等を襲へばまた停まる。アルラーや若し欲しなば、必ず彼等の耳目を奪はん、アルラーやは万事を能くす▲一〇

人々よ、汝等其身を護るために汝等並に汝等の先人を創れる汝等の主に事へよ▲一一 主は汝等のために大地を絨毯とし、蒼穹を屋宇とし、汝等の糧なる果実を実らしむ。されば汝等知りて同位者をアルラーやに配する勿れ▲一二 汝等若し吾僕に降せるものを疑はば、之に類する一章を作り、若し汝等の言真実ならば、アルラーや以外の汝等の証人を喚べ▲一二 汝等若し之を能くせずば、而して汝等決して能くせざるべし、然らば即ち不信者のために準備せらるる人と石とを薪とする火獄に對して其身を護れ▲一三

(1) 古蘭に於て『人々よ』と言ふ時は、原則としてメッカ市民を対象とし、メヂナ市民に対しては『汝等信者よ』と呼ぶを常とす。従つて本章其他のメヂナ諸章のうち、『人々よ』と呼びかけたる諸節は概ねメッカ啓示なりとする学者多し。セール、ネルデケ、ロッドウエルの諸氏皆然り。されど第四女人章の如き明白なるメヂナ章が『人々よ』といふ呼びかけにて始められ居るが故に、単に此事のみを以てメッカ啓示と断定することは必ずしも正当なりと言ふべからず。ベルは第二節以下をメヂナ初期の啓示とし、予もまた之に従ふ。

(2) マホメットを指す。

(3) 多神教徒の拝する石又は石像。

(4) 火獄の原語は An-Nar にして『火』を意味す。古蘭に於て地獄は最も屢々ナールと呼ばれ、別に約三十個處に於て Jannaham と呼ばる。予はナールを常に『火獄』と訳し、ジャハンナムを『地獄』と訳せり。

信じて善事を行ふ者には、彼等のために河川流るる楽園ありとの吉報を伝へよ。彼等其処にて果実の糧餉を賜はる毎に『こは吾等が以前に賜はれるものなり』<sup>〔一〕</sup>と言はん。彼等は之に類するものを賜はるなり。また其処には彼等のために純潔なる配偶あり、彼等長久に其中に住まん<sup>〔二〕五</sup>

(1) 『以前』とは楽園に入る以前即ち現世を指す。楽園にて賜はる果実が、現世の美果に類するを言ふ。

げにアルラーは蚊又は其より上なるものを比喩に挙ぐることを恥ぢ<sup>〔三〕</sup>。信する者は其の彼等の主よりの真理なることを知る。されど信せざる者は曰く『アルラーは是くの如き比喩によりて、果して何事を教へんとするか』と。主は之によりて多くの人々を迷はしめまた多くの人々を導く。彼は之によりて唯だ道に背く者を迷はしむるのみ<sup>〔四〕六</sup>。彼等は結約の後にアルラーハとの約束を破り、アルラーが結べと命じたるものを離間し、地上に於て惡事を行ふ者なり、此等は必ず淪喪者たらん<sup>〔五〕七</sup>

SAMPLE  
Shareni-Shanshu.com

(1) 古蘭中、蚊又は蜘蛛などの卑近なる比喩を挙ぐることを嘲笑せる猶太人に対して答へたるものとせらる。

汝等如何なればアルラーを信ぜざるか。彼は汝等が死してありし時に生命を与へたり。彼はまた汝等を死なしめ、再び汝等を甦らしめん。其時汝等は彼に帰らしめらる▲元 汝等のために地上の万物を創れるは彼なり。然る後に彼は天に登り、之を七層の天となせり。彼は万事を知る▲三元

(1) 父の腰間に在りし時は死してありしが、母の胎内に入りて生命を得とするなり。

(2) 天を七層となせるは、タルムード又は之に拠れる伝承によれるものにして、猶太教より学べることの一つとせらる。

汝の主が諸天使に向つて『げに吾は地上に一代理者を置かんとす』と言へる時を念へ。彼等曰く『汝は地上に悪を作し、血を流す者を置かんとするか。吾等は汝を讃へ、汝の聖潔を頌むるに非ずや』と。彼曰く『吾は汝等の知らざることを知る』と▲元 彼即ち万物の名をアダムに教へ、然る後に之を諸天使に示して曰く『汝等の言真実ならば、此等の物の名を告げよ』と▲三 彼等曰く『汝に栄光あれ、吾等は汝が吾等に教へたるもの之外に如何なる知識もなし。げに汝こそ能知者・聰明者なれ』と▲三 彼曰く『アダムよ、其等の物の名を彼等に告げよ』と。而してアダム其等の名を彼等に告げたる時、彼曰く『吾は汝等に《吾は天地の秘密を知る、また吾は汝等が露すこと並に匿すことを知る》と告げざりしか』と▲三

またわれ諸天使に向つて『汝等アダムに叩首せよ』と言へる時を念へ。其時彼等みな叩首せしが独りイブリースのみ傲然として之を拒み、不信者の一人となれり▲四 吾曰く『アダムよ、汝と汝の妻とは楽園に住み、隨處に豊かに食へ。唯だ作惡者とならざらんがために此樹に近づく勿れ』と▲五 然るにサタン彼等を誑かしめ、その居りし処より遂はるに至らしめたり。吾曰く『汝等此処より降れ』と▲四 汝等の一人は他の敵たるべし。

而して地上には汝等のために暫時の居処と糧餉とあり』と▲三其時アダム若干の言を其主より賜はり、主は彼の懺悔を允したり。『げに彼は允懺悔者・大慈者なり▲三七 吾曰く『汝等相携へて此処より降れ。他日わが嚮導必ず汝等に到らん。而してわが嚮導に従ふ者には、恐怖なく憂懼なからん▲三八 されど信ぜずしてわが休徵を虚偽なりと言ふ者は火獄の徒にして、彼等は永劫に其中に住まん』と▲三九

(1) イブリース Iblis は天使に非ず、悪き幽鬼なり。古蘭第一五章第二七節に『吾は（アダム）以前に無煙の烈火にてジャーン Jānn を創れり』とあり。レーンによればジャーンは即ち幽鬼の始祖イブリースなり。

(2) 或は無花果なりとし、或は葡萄なりとし、或は麦なりとし、定説なし。

(3) サタン Sharāt は此處にてはイブリースと同一幽鬼の名なり。但しサタンは固有名詞として用ひらるると同時に、惡鬼の通称として普通名詞に用ひらる。

(4) この命令は双数に非ずして複数なれば、アダム夫婦並にその子孫を含むものとすべし。汝等の一人は他の敵たるべしとは、人類の互に対立し抗争することを意味す。

(5) アルラーへを讃美し、之に禱る言。

(6) 『休徵 Āyāh (複数 Āyāt)』は古蘭中に最も頻出する語にして、本来は見聞し得る表徵を言ひ、種々なる意味に用ひらる。即ち天啓・奇蹟・神命・休徵等、みな此語を以て表現せられ、且古蘭の諸節もアーヤートと名づけらる。蓋し古蘭はアルラーへの啓示のうちの最勝たるものとせらるが故なり。

イスラエルの児等よ、汝等に垂れたるわが恩寵を念ひて、吾との約束を完うせよ。然らば吾また汝等との約束を完うせん。されば吾を敬へ▲四〇 汝等が所持するものを確証するためにいま吾が降せるものを信じ、之を信ぜざる者の首先となる勿れ。わが休徵を些少の代価に換ふる勿れ。而して吾を畏れよ▲四一 虚偽を以て真理を蔽ふ勿れ。知りつつ真理を隠す勿れ▲四二 礼拝を守り、捐課<sup>(2)</sup>を納め、諸礼拝者と共に礼拝せよ▲四三 汝等は經典を読みて善事を他に勧めながら、自ら之を行ふことを忘れたるか。汝等なほ曉らざるか▲四四

(1) 汝等が所持するものとは、猶太人に降されたる啓示即ちモーゼ五書並にダビデ詩篇、いま降せるものとは古蘭。  
(2) 『捐課 Zakāt』は後には法律によつて定められたる租税を意味するも、初期回教に於ては信心の発現としての慈善即ち財物の喜捨を意味せり。是亦マホメットが猶太教より学べる一つとせらる。メヂナ遷都以後、教団の経費次第に多きを加へ、殊に不信者に対する頻繁なる戦争が最も多くの費用を要するに及んで、喜捨は政治的財源の性質を帶び来り、従つて古蘭中に極めて屢々喜捨の功德高調せらる。

忍耐と礼拝とによつて佑助を求めよ。されどそは謙虚者ならでは難きことなり▲四五 謙虚者はやがて彼等が其主に会ふこと、また其主に帰り往くことを知る▲四六

(1) この両節は猶太人に対してに非ず、信者への啓示とすべし。恐らく錯簡なり。

イスラエルの児等よ、汝等に垂れたる吾が恩寵と、わが万民に優りて、汝等を選べることとを念へ▲四七 一人が他人のために一事を為し得ず、如何なる勧解も允されず、如何なる佑助を得られざる日に對して己れを護れ▲四八 われ汝等をファラオの民より救へる時を念へ、彼等は残酷なる懲罰を汝等に加へ、汝等の女子のみを残して男児を屠り去れり、其中には汝等への偉大なる試練ありしなり▲四九

(1) 末日を指す。  
(2) 旧約出埃及記第一章第一一二二節参照。

其時われ海を分ちて汝等を救ひ、汝等の目前にてファラオの民を溺れしめたり▲五〇 其時われ四十夜に亘りてモーゼと約束を結びつつありし間に、汝等彼の在らざるに乘じ、犢を拝して不義者となれり▲五一 其後われ汝等を赦したるは、汝等をして感謝せしめんがためなり▲五二 またわれモーゼに經典と識別とを与へたるは、汝

等が正しく導かれんがためなり▲五三

(1) 旧約出埃及記第一四章第二一節参照。

(2) 同上第二四章第一八節参照。

(3) 同上第三二章第六節以下参照。

(4) 『識別 Furqân』とは正邪善惡の識別なり。此語は古蘭中にモーゼに降されたる律法 Taurât の名称として、また吉蘭其者の別名として、並にバドル会戦の勝利の名称として用ゐらる。此処にてはバドルの戰勝をフルカーンと呼べる如くファラオの民を溺れしめて猶太人を救へることを爾く名づけたるものと思はる。

其時モーゼ其民に告げて曰く『吾民よ。げに汝等は犠牲を挙して罪を犯したり。されば汝等の創造者に懺悔し、自ら之を殺すべし。是くするは汝等の創造者の目に最も佳し』と。かくて彼は汝等の懺悔を允したり。げに彼は允懺悔者・大慈者なり▲五四。其時汝等曰く『モーゼよ、吾等明らかにアルラーを見るまでは汝を信ぜず』と。かくて見る間に電火汝等を襲ひたり▲五五。其時われ汝等を死より甦らしめたるは、汝等をして感謝せしめんがためなり▲五六。われ即ち白雲を以て汝等を覆ひ、マナと鶴とを汝等に降して、わが与ふる佳きものを食へと告げたり。げに彼等は決して吾を害へるに非ず、自ら其身を害へるなり▲五七。

(1) 猶太人は四百年に亘る埃及人との接触によりて、その牝牛崇拜に感染せるものとせらる。古蘭第二〇章第八六一九七節参照。

(2) 汝等自身の手にて、犠牲崇拜を勧めたる張本人を殺すべしとの意味なり。旧約は此の張本人をモーゼの兄アロンなりとするも、回教徒は之をアッサミーリ As-Samîri なりとす。

(3) 電火に撃たれて死にたるを甦らしめたること。

(4) 旧約民数記略第二一章参照。

SAMPLE  
Shotshi-Shinsu.com

其時吾曰く『汝等此市<sup>まち</sup>に入り、隨處に豊かに食へ。敬礼して門を入り、《赦し給<sup>(2)</sup>》と唱へよ。然らば吾は汝等の罪を赦し、一切の善行者には報賞を贈さん』と<sup>五八</sup>。然るに彼等のうちの不義なる者は、彼等に告げられたる言<sup>(3)</sup>を他の言に代へたり。されば吾は其等の不義を行へる者の上に天譴を降したり▲九

(1) 恐らくシチム Shittim 又は之に近きエリコ Jericho なるべし。旧約民数記略第二五章第一節、同上第三三章第四九・五〇節参照。

(2) 原語 Hittatun。

(3) Hittatun ひたぶるべきを『Hibbatun 穀類』又は『Hintatun 大麦』と言へりと伝へらる。

またモーゼ其民のために水を求めたる時、吾曰く『汝の杖にて岩を打て』と。即ち其岩より十二の泉湧き出で、各族みな己れの飲むべき場所を知りたり。(吾曰く)『アルラーハが賜へるもの食ひ且飲め。地上に惡を作して害毒を流す勿れ』と▲十

(1) 旧約出埃及記第一五章第二三――五節、同上第一七章第一――六節参照。

汝等は言へり『モーゼよ、吾等一いの食物に堪えず、されば吾等のために汝の主に祈れ。主をして地に生ずる若干のもの、即ちその青菜、その胡瓜、その麦、その扁豆、その葱などを吾等のために生ぜしめよ』と。モーゼ曰く『汝等は佳きものの代りに之に劣れるものを求むるか。去りて埃及に往け。然らば汝等が求むるものを獲ん』と。かくて彼等は屈辱と困窮とを蒙り、またアルラーへの激怒に遭へり。これ彼等がアルラーへの休徵を信ぜず、且妄りに諸予言者を殺せるが故なり。これ彼等が背きて捷を破れるが故なり▲一

(1) 旧約民数記略第一一章第五一一〇節参照。

(2) 原語 Misr。此語は埃及を意味するも、回教註釈家は多く此語を以て『都市』を意味する普通名詞となす。

げに（汝に降されたる啓示を）信ずる者、猶太人たる者、基督教徒、並にサービ教徒、そのいづれたるを問はず、アルラーと末日とを信じて善事を行ふ者は、必ず其主の報賞を受けん。而して彼等には畏怖なく憂懼もなからん▲<sup>三</sup>

(1) 此の一節前後と連絡なし。

(2) サービ Sabi 教については定説なし。或はセトの子サービを教祖とするが故に此名ありと言ひ、或は之を以て日月星辰を意味するヘブライ語 Isra'el の転訛なる拜天教なりとし、或はアラマイク語の転訛にて『受洗者』を意味し、当時『洗礼のヨハネ派』と呼ばれしシリアの諸異端基督教の一と酷似せる宗教なりとす。そのいづれにもせよ此の教徒は獨一の神と末日とを信じたるものなり。古蘭中の他の二個外、即ち第五章第六九節及び第三二章第一七節に此の宗教の名を挙ぐ。而して此語はまた一教より他教に転ずる意味あるが故に、マホメットは当初メッカ市民より『転向者 As-Sabi』と呼ばれたりと言はる。

われ汝等と約束を結び、汝等の頭上に山を擡げて『わが汝等に降せるものを護持し、己れを護るために其中に記されたることを銘記せよ』と言へる時を念へ▲<sup>三</sup>然るに其後汝等また背けり。若し汝等に対するアルラーへの恩恵と慈悲となかりせば、汝等は既に淪喪者のうちに入りしなり▲<sup>四</sup> 汝等は汝等のうちに安息日の掟を破りし者ありしを知る。われ彼等に告げて曰く『汝等猿となれ、蔑まれ且憎まれよ』と▲<sup>五</sup> 吾は之を以て彼等並に次代の者への鑑戒となし、且其身を護る者への訓誡となせり▲<sup>六</sup>

(1) ベルは此の一段（六三—六六）を以て、もと第四七—五三節の一段に続くものとなせり。

(2) 回教の伝承によれば猶太人がモーゼの律法を奉ずることを肯んぜざりしを以て、アルラーはシナイ山を彼等の頭上に擡げ、之を威嚇して信受せしめたりとなす。

(3) ダビデの治世に当り、紅海岸のアイラ Ailah に住める猶太人が安息日に漁獵を事とせるため、遂に神怒に触れて猿となれりとする伝承。

SAMPLE  
ShowShinji.com

(1) モーゼが其民に告げて『アルラーハは汝等が牝牛を犠牲に供へんことを命づ』と言へる時を念へ。其時彼等曰く『汝は吾等に戯るるか』と。彼答へて曰く『吾はアルラーハに佑助を求む、吾を愚者の一人たらしむる勿れ』と▲モ。彼等曰く『吾等のために汝の主に祈り、主をして其の如何なる牝牛なるかを吾等に明示せしめよ』彼曰く『主は言ふ、そは看る者を欣ばしむる鮮黄の牝牛なりと』▲モ。彼等曰く『吾等のために汝の主に祈り、主をして其の如何なる牝牛なるかを吾等に明示せしめよ。牝牛は吾等には概ね一律に見ゆ。願くはアルラーハの指示に従はん』▲モ。彼曰く『主は言ふ、そは地を耕し野に灌ぎて疲れざる牝牛、無疵の牝牛なりと』彼等曰く『いま漸く汝は真実を告げたり』と。かくて彼等は心ならずも之を犠牲に供へたり▲モ。これ汝等人を殺し、その殺害者について相諍へる時、アルラーハは汝等が匿さんとせることを露顕せしめんとせるなり▲モ。吾曰く『其の牝牛の一肢を以て彼を打て』と。かくしてアルラーハは死者を甦らしめ、汝等に其の休徵を示したり。これ汝等を曉らしめんがためなりき▲モ。然るに其後汝等の心は石の如く硬く、また石よりも硬くなれり。そは石の中には河川其間より湧くものあり、また自ら崩裂して水を其中より流れ出でしむるものあり、またアルラーハを畏れて自ら墜落するものあるが故なり。アルラーハは決して汝等の為すことを看過せず▲モ。

(1) 第六七—七三節は、殺人の罪を犯せる者を発見するため、モーゼが牝牛を神に供へしめたりといふ伝承によるものなり。即ち犯人の誰なるかを知り得ざりし時、モーゼ天啓によりて牝牛を神前に供へ、其中の一肢を以て被害者を打ちしに死者忽ち甦りて、己れを殺せる者の名を告げたりといふなり。旧約民数記略第一九章第一一九節、申命記第二一章第一一九節参照。

汝等なほ彼等が汝等を信ぜんことを望むか。彼等の或者はアルラーハの言を聴き、之を会得したる後、知り

つつ之を変改せり▲五　彼等信者と遇ふ時は曰く『吾等もまた信ず』と。されど彼等のみなる時は即ち曰く『汝等はアルラーへが汝等に降せるものを彼等に示し、彼等をして之によつて汝等の主の前に汝等と争論せしめんとするか。汝等曉らざるか』と▲六　彼等はアルラーへが彼等の匿すこと並に露すことを併せ知ることを知らざるか▲七　彼等のうちには妄伝のみを知りて經典を知らざる文盲者あり。彼等は唯だ臆測するのみ▲八　されど己れの手もて經典を書き、些少の利益を獲んがために『こはアルラーへより降されたるものなり』と言ふ者は禍なるかな、彼等が之によりて利得することは禍なるかな▲九　而して彼等曰く『獄火の吾等に触るるは若干日の間のみ』と。言へ『汝等は是くの如き約束をアルラーへと結びたるか。果して然らばアルラーへは約束を破らざるべし。又は汝等己れの知らざるアルラーへについて語るか』と▲十　然らず、惡事を積み、諸惡身を閉む者、此等は實に火獄の徒にして、永劫に其中に住まん▲十一　されど信じて善事を行ふ者、此等は樂園の徒にして、長久に其中に住まん▲十二

- (1) 『彼等』とは猶太人、『汝等』とはメヂナの信者を指す。此の一段は猶太人が經典を変改又は曲解せりとし、また經典をマホメットの信者に隠蔽せりとして非難を加ふるものなり。
- (2) 『妄伝』の原語は空想・空望等の意味。此處にては猶太人の教師が教ゆる伝承を指せるものとすべし。經典とはモーゼ五書なり。
- (3) 經典を変改して書写せりとの意味なるべし。
- (4) 若干日とは四十日、即ちモーゼの不在に乗じて猶太人が犢を拝したる日数。

われイスラエルの児等と約束を結べる時を念へ。其時吾曰く『汝等アルラーへの外に何者にも事ふる勿れ。汝等の父母と近親と孤児と貧者とに善くし、人々に愛語し、礼拝を守り、喜捨を行へ』と。然るに其後汝等のうち少數の者を除き、忌避して約に背ぎたり▲十三　またわれ汝等と約束を結べる時を念へ。其時吾曰く、『汝等

SAMPLE  
Shoshi-shinsui.com

己れの血を流すべからず、汝等の居處より己れの民を逐ふべからず』と。而して汝等之を確認し、且汝等自身その証人たりしなり▲六四 然るに汝等互に相屠り、汝等の一部をその居處より逐ひ、罪惡と敵意とによつて互に其敵を助けたり。而して彼等若し俘虜となりて汝等に来れば、之を逐へることが既に違法なるが上に、更に贖金を受納して之を釈放せり。汝等は經典の一部を信じて他部を拒む者なるか。果して然らば是くの如きことを敢てする者の応報は現世に於ける屈辱並に復活の日に於ける極刑に非ずして何ぞ。アルラーは汝等の為することを看過せず▲六五 是くの如きは來世の価を以て現世を買へる者なり。彼等の懲罰は輕減せられず、且彼等は如何なる佑助をも得ざるべし▲六六

- (1) シナイ山に於けるモーゼとの約束。
- (2) マホメットがメヂナ遷都の直後に猶太人と結びたる契約を指す。
- (3) メヂナのアウス・カズラジ両アラビア族が相争へる時、クライザ・ナヅィールの両猶太族が、相分れて相争ふアラビア族に加担し、互に相殺戮し、且互に其の住居を破壊せることを言ふ。

げに吾はモーゼに經典を与へ、諸使者をして彼の後を継がしめたり。また吾はマリアの子イエスに明白なる休徵を与へ、且聖靈を以て彼に助力せり。然るに使者が汝等の喜ばざるもの斎して汝等に至る毎に、汝等傲然として或者をば虚言者と呼び、或者をば殺害せるに非ずや▲六七 彼等曰く『吾等の心は覆はれたり』と。然らず。アルラーは其の不信の故を以て彼等を呪咀せり。彼等は殆ど信ぜざるなり▲六八 いま彼等が所持するものを確認する經典が、アルラーより彼等に降されたり。然るに曾ては不信者に対する勝利を祈願しながら、いま其の承認せるものが彼等に至るに及んで、彼等之を信ぜんとせず。さればアルラーの呪咀、不信者の上にあり▲六九 彼等がアルラーの降せるものを信ぜざるは、アルラーが其の僕等のうち己れの好むところの者に恩寵を垂るることを、嫉むが故にして、げに其魂を廉価に売り去れるものなり。かくて彼等は神怒の上に神に

怒を招げり。而して不信者には恥づべき懲罰あらん▲九人あり、彼等に向つて『アルラーへの降せるものを信ぜよ』と言へば、彼等曰く『吾等は吾等に降されたるものをして信ぜず』と。されど其後に降れるものは、設ひ彼等が所持するものを確証する真理なりとも、決して之を信ぜざるなり。言へ『汝等若し信者ならば、何故に曾てアルラーへの予言者等を殺せるか』と▲九

- (1) 聖靈Ruhu <sup>1</sup>[Qudus] は、基督教に於ける聖靈に非ず、天使ガブリエルJibrīlを指す。古蘭をマホメットに伝へたるもまたガブリエルなりとせらる。
- (2) メヂナの猶太人は、曾てアウス・カズラジ両族のために迫害せられし時、常に彼等を征服する救世主の出現を祈願し居たることを言ふ。
- (3) アルラーへの好むところの者とはアラビア人たるマホメットを指す。即ち予言者が猶太人の間に出て、アラビア人の間に出てたることを嫉視するを言ふ。

げにモーゼは明瞭なる休徵を齎して汝等に至れるなり。然るに汝等は犠牲を挙して不義者となれり▲九一而してわれ汝等と結約し、山を汝等の頭上に擡げて『わが汝等に賜へるものを持て』と告げたる時、彼等は『吾等は聽く。されど背く』と言へり。かくて彼等は其の不信のために、犠牲を中心に入呑ましめられたり。言へ『汝等若し信者ならば、汝等の信仰が汝等に命ずるところのものは悪むべきかな』と▲九二言へ『若しアラーハと偕なる来世の居処が、自余の民を排して専ら汝等のものならば、而して汝等の言真実ならば、汝等即ち死を望め』と▲九三されど彼等は其手が予め送れるもののために、決して死を望まざるべし。げにアルラーは不義者を知る▲九四汝は彼等が生に執着すること最も甚だしき民にして、實に多神教徒よりも甚だしきことを知らん。げに多神教徒のうちには千年の寿命を望む者あり<sup>(3)</sup>（麻那ハ復）。されど設ひ長寿を恵まるとも、そは懲罰を免るる所以に非ず。アルラーは彼等の為すことを照覧す▲九五

- (1) モーゼ、彼等の作れる犠の神像を灰燼に帰せしめ、之を河中に投じてイスラエルの児等に飲ましめたりとの伝承。旧約出埃及記第三二章第二〇節、申命記第九章第二一節参照。註釈家の或者は『心中に呑ましめられたり』といふは、犠を崇拜する心を生ぜしめられたる意味と解す。
- (2) 其手が予め送るものとは、最後審判を受くべき現世に於ける言行を意味し今後古蘭中に頻出す。
- (3) 多神教徒とは恐らくゾロアスター教徒を指す。彼等は人を祝福するに当りて常に千年の寿を祈願せり。

言へ『ガブリエルの敵は誰ぞ<sup>①</sup>』と。げに彼こそアルラーカの命を奉じ、信者への嚮導並に吉報として、以前に降されたるものを確証する古蘭を汝に啓示せる者なれ▲九七 アルラーカ、その諸天使、その諸使者、ガブリエル、さてはミカエルの敵は誰ぞ。げにアルラーカは不信者の敵なり▲九八 げに吾は証拠として諸の休徵<sup>②</sup>を汝に降したり。作惡者の外は誰か之を信ぜざるものぞ▲九九

- (1) ガブリエルは懲罰の執行者として猶太人の惡むところ、ミカエルは愛護者として其の好むところなり。猶太人がマホメットに神意を伝ふる天使は誰ぞと問へるに對し、そはガブリエルなりと答へたる時、彼等は若しミカエルなりせば吾等も之を信ぜんと言へりと伝へらる。
- (2) 此處の休徵は古蘭の諸節を指す。

彼等約束を結ぶ毎に、彼等の一部は必ず之を破ると言ふか。然らず、彼等の多くは信ぜざるなり<sup>①</sup>▲一〇八

- (1) 此の一節前後と連絡なし。但し猶太人の背信を糾弾せるものなり。

アルラーカの使者彼等に來りて、其の所持するものを確証する時、經典を賜はりたる者の一部は宛も知らざるが如く裝ひて、アルラーカの經典を背後に棄つ▲一〇九 彼等はソロモンの世にサタン等が好んで読誦せるもの

に従ふ<sup>(2)</sup>。ソロモンは不信者なりしに非ず、信ぜざりしはサタン等なり。彼等は人々に妖術を教へ、またバベルにてハールート・マールート<sup>(3)</sup>の両天使に降されしものを教へたるなり。されど両天使は先づ『吾等は一個の誘惑に他ならず。されば決して不信者となる勿れ』と告げたる後ならでは、何人にも教ゆることなかりき、かく人々は、夫婦を離間する術を両天使に学びたり。されど彼等はアルラーへの允許なくしては、何人をも之によつて害することなかりき。彼等は己に害ありて益なきことを学べるなり。而して彼等は、此術を購へる者が来世を与ることなきを知れり。げに彼等は廉価に其魂を売れる者なり。彼等若し此事を知りたりせば▲一〇三　彼等若し信じてアルラーへを敬ひたりせば、更に佳き報賞をアルラーへより得たりしなるべし。彼等若し此事を知りたりせば▲一〇三

(1) 猶太人並に基督教徒、即ち『受經者 Alī'l-Kتاب』。

(2) 此の一旬は『ソロモンの支配に抗せるサタン等が捏造せるものを信奉す』とも解せらる。伝承によれば、サタン等はソロモンを誘惑せんとして果たさず、よつて幾多の『魔術の書』を書きて之をソロモンの王座の下に埋め置き、王の死後に之を発掘せしめたり。而して猶太人は此等の書によつて魔術を習得せりと言はる。

(3) Hārūt 及び Mārit<sup>(4)</sup>は、人間を試むるために地上に降されたる二天使なるが、罪を犯して神怒に触れ、現世・来世のいづれに於て罰せらるべきかを択べと告げられ、現世にての懲罰を乞ひため、長くバベルの岩窟内に倒懸せらるるに至れりとの伝承。

汝等信者よ、ラーアイナーと言ふ勿れ、ウンズルナート<sup>(1)</sup>と言へ、而して耳傾けよ。げに不信者には痛刑あらん▲一〇四

(1) Rā'īnā は『吾等に聽け』 Uzurñā は『吾等を視よ』の意味にして、共に信者等がマホメットに対して用ゐたる挨拶の言葉なり。但しラーアイナーは僅にアクセントを変へて発音する時は『わが愚者よ』又は『わが悪漢よ』の

意味となり、猶太人が回教徒を愚弄するため好んで此の拶拶を用ゐたるため、その使用を禁じたるなり。

受経者中の不信者並に多神教徒は、汝等の主が如何なる善事をも汝等に降すことを欣ばず。されどアルラー  
ハは己れの好む者を選んで慈悲を之に垂る。げにアルラーは偉大なる施恩者なり▲一〇五

われ古蘭の如何なる諸節を撤廃するとも、又は之を忘却せしむるとも、吾は必ず之に優る又は之に等しきもの<sup>①</sup>を賜ふべし。汝はアルラーへが全能なるを知らざるか▲一〇六 汝は天地の大権がアルラーに属するを知らざるか。またアルラーの外に一守護者なく、一佑助者なきことを知らざるか▲一〇七 又は汝等は、曾てモーゼが問はれし如く、汝等の使者にも問はんとするか<sup>③</sup>。げに信心を以て不信心に換ふる者は、正しき道より迷ひ去れる者なり▲一〇八

(1) この一段は以前に降されたる古蘭の諸節を、以後の啓示によりて撤廃することを是認するものにして、恐らく猶太人の非難に対してなされたるものなり。是くの如くにして撤廃せられたる諸節の数については学者の所説区々にして、少きは僅に五節、多きは二三五節を挙ぐ。

(2) この『汝』は撤廃を非難せる猶太人を指せるものとすべし。  
(3) 明らさまに神を見んことをモーゼに求めたることを指す。本章第五五節参照。

受経者の多くは、真理が明示せられたる後に於ても、己れの嫉妬のために、既に帰信せる汝等を再び不信者たらしめんことを願ふ。されどアルラーの命令至るまでは、彼等を容赦して、意に介すること勿れ。げにアルラーは全能なり▲一〇九 礼拝を守り、捐課を納めよ。汝等が己れのために予め送る一切の善事は、皆なアルラーハの許にあり。げにアルラーは汝等の為すこと照覧す▲一一〇

彼等曰く『猶太人及び基督教徒の外は何人も樂園に入るを得ず』と。これ彼等の空望なり。言へ『汝等の言

真実ならば其の証拠を示せ』と▲二一 然らず、善事を行ひて、アルラーに帰命する者は、必ず其主より報賞を受け、畏怖なく憂懼なからん▲二二 猶太人曰く『基督教徒は拋るところなし』と。基督教徒また曰く『猶太人は拋るところなし』と。両者は共に同一の經典を読誦する者なり。而して知識を所持せざる者もまた同様の言を為す。復活の日に於て、アルラーは彼等の争点に対し判決を下すべし▲二三 而もアルラーの礼拝堂に詣でて其名を唱ふるを拒み、また之を毀つよりも甚だしき不義あるか。彼等は恐懼せずしては之に入るを得ざるなり。彼等は現世に於て屈辱を、来世に於ては重刑を受けん▲二四 東も西もアルラーに属す。汝等いづれの方位に向ふとも、其處にアルラーの慈顏あり。げにアルラーは遍在者・能知者なり▲二五 彼等曰く『アラーハに子あり』と。彼を讚へよ、断じて然らず。天地間の万物は彼に属し、一切のものは彼の命令に服す▲二六 そは天地の創造者なり。かれ一事を決して、唯だ『有れ』と言へば即ち有り▲二七

- (1) 『知識』とは天啓の知識にして、知識なき者は天啓の經典を所持せざる多神教徒を指す。
- (2) この一節は若しメッカ市民を対象とするものとすれば、遷都六年マホメットが信者を率ゐてメッカ参詣を企て、ホーダイビーヤに到れる時、メッカ市民が之を阻止せるを言へるものとすべく、従つて前後諸節と啓示年代を異にすることとなる。それ故にロッソドウエルは、若し然りとすれば此の一節は錯簡なるべしとせり。但し若し猶太人を指すとすれば、礼拝堂とはエルサレム神殿にして、波斯人のエルサレム攻略に際し、猶太人の之に加勢せる者ありしを糾弾せるものとすべし。
- (3) 従来エルサレムに向へる朝向をメッカに変更することを予言するものとすべし。但し此の一節は本章第一四四節によつて撤廃せられ、朝向は必ずメッカに面すべしと定められたり。
- (4) イエスを神子なりとする基督教の信仰を言ふ。

知識を有せざる者曰く『何故にアルラーは吾等に物言はざるか』と。彼等以外の者もまた是くの如く言へり。彼等の心は酷似す。吾は既に種々なる休徵を堅信の民に明示せり▲二八

SAMPLE *tinyprint.com*